



ロンドン塔の守りは我らに その名もビーファイター

今でこそロンドン塔は、兵器や武器などの博物館として毎年二百万人以上の観光客を集めるイギリス第一の名所となっているが、中世以来、近代初めまでは国事犯の監獄として使用され、恐れられていた。

ここで監禁・処刑された囚人は、トーマス・モア（人文学者、『ユートピア』の著者）、アン・ブーリン（エリザベス一世の母）、ジェーン・グレイ（「九日女王」）ら多数で、陰惨な影をロンドン塔の歴史に落としている。

なお、ここにはワタリガラスが六羽飼われているが、この鳥が場内にいるかぎりは王国は安泰なりという言い伝えが残されている。

実は逃げ出せないように、その羽は切られているのだという。

このロンドン塔を警備・案内しているのが、バッキンガム宮殿の衛兵と並ぶ人気者、黒と赤の制服のヨーマン・ウォーダーである。

彼らの俗称をビーファイターズ（大肉食らい、栄養のよい人）というが、その名の起こりははっきりしていないが、いくつかの説があるので紹介しておこう。

国王の食事に牛肉が出されたとき、彼らウォーダーは国王の食事後、短剣に刺せるだけの

牛肉を持って帰ることが許され、そのことから大肉食らいの名が生まれたという。

また一六六九年にトスカーナ大公のコジモが王宮の宴席に招かれた時、彼らが多量の肉を与えられることを聞き、「その見事な体格は、たくさんの牛肉を食べるからだろう」と語ったことによるともいう。

さらにヘンリー八世がヨーマン・ウォーダーに変装してお忍び旅行をしたとき、ある旅籠はたごでその健啖けんたんぶりを発揮したことから、亭主が、「ビーファイター」と呼んだのが始まりだともいう。

その姿は、ジン「ビーファイター」のラベルに描かれ、全世界で親しまれている。